

国語 解答用紙

番号 氏名

評点 / 100

〔注意〕 解答に句読点や記号などが含まれる場合は一字に教えます。

一	①	A		②	A		③	A		④	A		⑤	A	
	B			B			B			B			B		

二	問一	1		2		3		4		5		6		問二
	問三	①				20					立場			
	問三	②												
	問四													
	問五													
	問六	①		②		③		④		⑤				

三	問一	①		②		③		④		⑤	
	問二		問三	1		2		3		4	
	問四		問五								
	問六							たろじ。			
	問七	4				5					

四																						

〔装〕 この解答用紙は小社で作成いたしました。

〔国語〕 100点(推定配点)
 一 各2点×5 二 問1 各2点×6 問2～問5 各3点×5 問6 各2点×5 三 問1 各2点×5 問2～問7 各3点×10 四 13点

喜ぶべきことと頭の隅では理解していた。しかし、早季子の身体の内側は、強烈な痛みを訴えていた。胸部だけではなく、下腹も足の指先も、どこもかしこもずきずきと痛んだ。

吉住くんが教えてくれた、嫌な気持ちになったときに右目を瞑ること、すっかり私の癖になっちゃったよ。

言わなくてよかった。こちらから先に話すよう促されなくて、本当によかった。この一点が、早季子の絶望に浮かぶ唯一の安堵だった。嵐の海での浮き輪のように、早季子はこれにしがみついた。

帰り道、早季子は「ずっと左目だけで歩いた。身体の痛みはなかなか治まらず、そのうち涙があふれてきて、車や家や雲や電柱や⑤ガイロジュヤ、いろんなものがぼやけてにじんだ。冷えた皮膚の上で、汗だけが熱かった。」

(奥田亜希子『左目に映る星』より)

※出題の都合上、本文の一部を改稿しています。

注1 逢瀬 男女がひそかに会うこと。

注2 遜色ない 劣らない。

注3 闊歩 周囲に気がねしないで大胆にふるまうこと。

問一 ①⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 Aにあてはまる文を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 走るなよ イ だめじゃないか

ウ 先生に言うぞ エ けがするよ

問三 空らん 1 4 にあてはまる語を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア うつくつ イ 不満

ウ 寄る辺なさ エ 興奮

オ はずかしさ カ いたたまれなさ

問四 1 「数回」とは何回くらいですか。次の中から選び、記号

で答えなさい。

ア 二回くらい イ 五回くらい

ウ 十回くらい エ 十五回くらい

問五 2 「吉住から醸しだされていた根拠のない特別さ」と同じ意味の文を本文中から十字以内で抜き出しなさい。

問六 3 「違和感」は何から発生したのか、次の空らんにあてはまるように本文中の表現を八字で抜き出しなさい。

たこと。

問七 早季子が 4 「吉住は生きられるようになった」と考えた
り、 5 「ずっと左目だけで歩いた」りしたのは吉住のどのセ
リフを受けてのことですか。それぞれ最初の六字で答えなさい。

四 スポーツを二つ挙げ、その違いを三つの観点から百五十字以内

で説明しなさい。

だ。白地に紺の線の入ったスニーカーが、タイルの上でころんと転がった。右の靴は底を上、左の靴は底を横にして停止した。

早季子の胸を、違和感が刺した。しかし、なにかから発生したものなのかはよく分からなかった。追究しようとする意識を抑え、急いで気を取り直す。せっかく吉住と言葉を交わせたのだ。この機を無駄にすべくなくた。

吉住に聞いてもらいたいことはたくさんあった。友だちとの会話、母親からの束縛、教科書の行間にも、茶碗に残った一粒の米にも、生活のいたるところに孤独の穴は開いていた。そこに落ちては負ってしまつた数々の傷を撫でて欲しい。だが、部活動中の吉住を長々引き止めるわけにはいかなかった。一つでいい。一つでいいから、なにか、なにか分かりますか。

「あの、吉住くん」

「そういえば」

声が重なった。二人は顔を見合わせ、しばし笑った。早季子のほうが先に笑い止んだので、どうぞと手で吉住を促した。吉住は、じゃあ僕から、と前置きしてから、

「僕ね、三ヶ月前からコンタクトレンズを使い始めたんだ。こっちは」

と、左目を指した。

「視界の感じはほとんど変わらないけど、乱視と近視を矯正したら、目はかなり疲れにくくなったよ。神田さんも試してみたら？」

早季子は頭の中で強い光が炸裂するのを感じた。思考回路は一瞬にして、白一色に塗りつぶされていった。まともになにかを考えることは不可能だった。早季子はうわごとのようにただ繰り返した。

「どうして？ どうして？ なんて、どうしてなんでコンタクトに？」

「小学校のときに比べて、部活が本格的になったから、そのほうがいかなって。野球のボールって白くて小さいでしょう？ あれを長時間目で追っていると、④ケツコウ辛いんだよ。それで眼科のお医者さんに相談したんだ。そうしたら、左目にだけコンタクトレンズをしたらどうかって。コンタクトって痛そうないメージがあつて、最初はちよつとどきどきしたけど、ソフトコンタクトならほとんど装用感もなくていいよ」

「そう……なんだ……そう……」

「あの……神田さんのほうはなに？」

「え？」

「さつき。言いかけたこと」

早季子はやつと我に返った。吉住の問いに、ぎこちなく首を横に振る。表情を取り繕わなければと思うものの、顔面の筋肉はまだ思うように動かなかつた。早季子の様子に吉住は怪訝そうな顔を見せたが、自分が部活動中であることを思い出したようだ。

「ごめん。そろそろ行かなきゃ」

「あ、うん。あの……部活、頑張つて」

「ありがと。神田さんは気をつけて帰ってね」

吉住は靴下のまま、職員室のほうへと廊下を駆けていった。それも小学生のころの吉住にはなかつた仕事だ。早季子はようやく、さきほどの違和感の正体を掴んだ。彼は廊下を走ったり、靴を脱ぎ散らかしたりする子どもではなかつた。むしろそういう子どもたちを優しく注意する役回りだった。

4 吉住は小学校に通うあいだ、ずっと大勢からの強い注目に見られていた。今、やつとそれから解放されたのだ。ぱっとしなくなつたのではなく、肩の力を抜いて生きられるようになった。きつと、そういうことなのだ。

「同じものを食べていても、感じる味は人それぞれ違うんだよね。本当の味ってきつと、人間には触れないところにあるんだろ、うね」

というよゆうなことを、吉住はしみじみ言うのだった。

そのたび早季子は泣きたくなくなった。人に理解してもらえない喜びと、それさえも打ち消せない孤独の寂しさと、膨れていく吉住への気持ちりが混ざり合い、感情の身動きが取れなかった。あのときの

4

を、早季子は今でもはつきり覚えていた。

早季子と吉住は同じ公立中学校に進学した。だが、クラスは分かれてしまい、また中学校の図書室は小学校のように閉鎖的な空間ではなかったため、落ちあえる場所もなかった。二人の距離は自然と離れた。早季子の中学はいわゆるマンモス校で、市内の三つの小学校の進学先となっていた。一学年が十クラス、全校生徒数は千を超えていた。

それ故、中学進学に伴う環境の変化も大きかった。制服や校則や授業や、そういった外面的な変化だけではなく、子どもが集団生活を送ることで生じる空気が、小学校とは桁違いに濃かった。異質も同質も反応し合って強度を増し、それが思春期^②ドクトクの精神回路に乗って、取捨がつかなくなる。早季子の中学は県内でも有名な、変わりものが多い学校だった。

そんな中でも吉住は、小学校時代と^{注2}遜色ない結果を残していた。クラスでは学級委員長を任せられ、野球部では一年生で唯一のレギュラーとなり、テストは常に学年で五位以内。誰も吉住の怒っている姿を見たこともなければ、吉住の悪い噂を耳にすることもない。同級生からも教師たちからも愛される存在として現役なことは、ほかのクラスにまで届いていた。

しかし、²吉住から醸しだされていた根柢のない特別さは、少しずつ薄まっていた。すぐに荒っぽい言動にはしる子や、授業中でも平気

で教室を出て行く子、髪の毛が金色の子や、写生大会で真っ赤な校舎を描き上げた子。そんな強烈な個性が^{注3}闊歩する世界で、吉住の存在感ほ明らかにな弱まっていた。

このことは早季子だけでなく、吉住の小学校時代を知る女子みんなが感じていた。なんだかばつとしくなっちゃったね、とはつきり言葉にする子もいた。吉住を好きだと^③コウゲンして憚らなかつた何人もの女子が、別の男子に鞍替えしたらしかった。

しかし、早季子の吉住への思いは変わらなかつた。彼は確かに変わったようだが、そもそも万人を惹きつける特別さが、吉住の魅力なのではない。乾いていて、少し冷たくて、寂しい音がする。図書室で見た秋風のような姿こそが、本当の吉住なのだ。自分が好きなのは本当の彼であり、その辺の軽薄な女子連中とは気持ちの深さが違う。優越感と共に、そう思っていた。

吉住の変化がもつと内部に及んでいたことを知ったのは、中学一年の冬だった。その日、早季子は日直だった。教室の戸締りと目録の提出を終え、さあ帰ろうと下駄箱の前に立ったとき、体操服姿の吉住が校庭からやって来た。

「吉住くん」

胸を高鳴らせながら声をかけると、吉住はすぐに気づき、

「神田さんだ。久しぶり。今帰り？」

と、目を細めた。小学校の卒業式以来、実に九ヶ月ぶりの二人きりで会話だった。

「うん。吉住くんは今から部活？」

「ううん、部活はもう始まっているんだ。今は体育準備室の鍵を借りに行くところ」

「部活、寒いのに大変だね」

吉住は、本当だよ、と笑いながら、すのこの前で勢いよく靴を脱い

は1数回の注1逢瀬に亘った。

すべてを語り終えたとき、季節は秋に変わっていた。校庭ではイチヨウが黄色の葉を散らしていた。

「分かるよ」

吉住が重々しく頷いて、早季子は本当に少し泣いた。ずっとさまよっていた宇宙空間で、やっと酸素を供給された気持ちだった。声は出さずに、はらはらと涙をこぼした。手のひらで拭いても拭いても止まらなくて、早季子は、ごめんね、と詫言った。

「謝ることないよ」

教室の吉住よりも、図書室の吉住のほうが大人みたいに優しい。早季子はそう思ってさらに落涙した。

自分たちは同じものを見ている。早季子の身体に痺れが走った。頭に浮かぶ同意の言葉は、どれも安易で軽薄に思えた。

「身体の中で、人はみんな一人なんだよ。自分以外の人間がなにをどう見ているかなんて絶対に分からない。身体がある限り、人は一人ぼっちで、つまり、寂しいのは当たり前のことなんじゃないかって、最近僕は思う」

「うん」

「でもこの当たり前前に気づくほど、寂しさっていうのは大きくなるんだよね」

昼休みの終わりを知らせる予鈴が鳴った。二人は同時に席から立った。木製の椅子の脚が床で跳ね、かたんと乾いた音がした。吉住が図書室のドアを開けると、目の前に色鮮やかな光景が広がった。黄葉した無数のイチヨウの葉が風に吹かれ、渡り廊下をひらひらと横切っていた。

私、吉住君のことが好きだ、すぐく。

早季子は自分の気持ちに唐突に気がついた。一方の吉住は、さっさ

と歩き出している。置いていかれないよう、慌てて吉住の横についた。

長い渡り廊下を抜け、教室のある校舎に入る前、吉住は足を止めた。「そうだ、神田さんにいいこと教えてあげる」

吉住の口調にはもうすっかり無邪気さが戻っていた。図書室で見せた大人の影はもうない。早季子もそれに合わせ、「なあに？」

と、若干の節をつけて応じた。吉住はくすぐったそうに微笑んだ。

「嫌だなんて思うことがあったとき、乱視のほうの目だけになるといいよ。いろんなものがぼやけて見えて、なんだかちよつとほつとするから」

そのときやや強い風が吹いて、イチヨウの葉が一枚、吉住の頭に行った。吉住は気づいていないようだ。取ってあげようと手を伸ばしかけ、早季子はすぐに引っこめた。指先がじんじんと熱かった。吉住に近づけた先から指が溶けていきそうに思われた。教室に着くまでのあいだ、何度も試みたが、結局早季子はそのイチヨウの葉を取ることができなかった。

「やだあ、吉住くん、頭に葉っぱついてるよ」

吉住の左隣の席に座る女子が、嬉しそうにイチヨウの葉を摘み上げた。その光景を、早季子は斜め後ろの席からぼんやりと見ていた。

六年生のクラスは五年生からの持ち上がりだったため、一ヶ月に一度の図書室での逢瀬は、二人が小学校を卒業するまで続いた。後半は取るに足らない話ばかりをしていた。自信満々だったテストの答えがまったく合っていないかったこと。目玉焼きにはソースか醬油かで、友だちと口論になったこと。

しかし、なにを話しているときでも、吉住は早季子に潜む孤独を的確に嗅ぎ当てた。早季子が笑いを交えて話しても、

「そうなんだ。ねえ。転校生って、どんな気分？」

「学校によっていろんなことが違うから、ちよつと大変かな」

「いろんなことって？」

「うん。例えば、この小学校だとあいいうえお順で机を並べるとき、教室の左前に先頭がくるでしょう？ で、最後が一番右の列の後ろの席。でも、前にいた学校は、先頭、あ行の子が右の列の一番前なのね。最後は一番左の列の後ろ。まったく逆なの。だから初めはびっくりしちゃった」

「へえ、そんなことまで違うんだ」

吉住は心底感心したように甲高い声を出した。そんなにたいした話でもなかったのにと、早季子は顔を赤らめた。

「吉住くんは、ずっとこの小学校にいるの？」

「うん。生まれたときからこの町に住んでる。幼稚園からの知り合いもいっぱいいるよ。だから神田さんが少し羨ましいな」

早季子は驚いた。友だちができるまでに苦労する早季子には、昔からの知人がたくさんいることを嘆く気持ちが理解できなかった。吉住は言葉を間違えたのではないかと、一瞬疑ったほどだった。

「どうして？」

吉住は早季子から視線を外し、窓を見て首を傾けた。

「自分のことを誰も知らないところに行けば、いろいろと楽になれる気がする」

思いもよらない、寂しげな声と言葉だった。早季子は虚を衝かれてしばし黙った。すると吉住は慌てたように、

「ごめんね。神田さんは転校が大変だって言っているのに、簡単に羨ましがって」

「ううん」

早季子はそつとあたりを窺った。司書の先生はまだ奥の準備室にい

るようだ。ほかには誰もいない。熟れた桃に触れるように①サイシンの注意を払って、さつきからずつと気になっていたことを尋ねた。

「吉住くん」

「うん？」

「さつき、どうして片目を瞑っていたの？」

「さつき？」

「私が図書室に入ったとき。吉住くん、左目だけで校庭を見た」

胸はひりつき、声は明らかに上ずった。吉住は気づいていないのか、気を遣ったのか、まったく表情を変えず、

「僕ね、左目にだけ、弱い近視と乱視が入ってるんだ。眼鏡をかけるほどではないんだけど。景色がぼんやりするのが面白くて、ときどき左目だけでものを見るんだ」

早季子はそれまでの十一年間に覚えたことのない②を感じた。胸が弾けそうに高鳴って、叫びたいほど嬉しいのに、同時に涙がでそうになった。なにかに感謝したくて、でもなかに感謝をしていいのかわからなくて、自分のスカートの裾を強く握った。手の甲に血管が浮き出るほど強く、強く。

「私も同じ」

「神田さんも？」

「私も左にだけ、少し」

それから早季子と吉住は、ときどき図書室で会うようになった。吉住は児童会にも所属していて忙しかったし、早季子も基本的には友だちと昼休みを過ごすことにしている。二人がそろって図書室に顔を出せるのは、せいぜい一ヶ月に一度だった。

やがて早季子は、抱えていた③を吉住に打ち明けた。左目だけでものを見たときの衝撃。そこから感じた世界の脆さ。人と分かれ合えない孤独感。昼休みの二〇分ではとても話しきれず、この話題

任命された吉住を見て、噂どおりだ、と感嘆もした。しかしこのころの早季子には、多くの女子が彼に抱いていた類の興味はなかった。話しかけることも話しかけられることもないまま、暦は五月に入った。

よく晴れて空の高い日だった。昼休み、早季子は図書室へと足を向けた。図書室とは呼ばれていたが、この小学校の図書室は、校舎と渡り廊下で結ばれた、実質の別館だった。校舎よりもずっと古い木造で、お化けがでるといふ噂もあつてか、児童からは不人気だった。

早季子はこの人気のなさが好きで、ときどき図書室に赴いた。友だちといることに、早季子はしばしば無性に疲れを覚えた。小学生の女子は、秘密を打ち明ける回数と友情の深さを比例して考えがちだ。それが苦痛だった。自分の本心をさらけ出すことと相手に友情を感じることは、まったく別問題だと思っていた。

だからといって、友だちよりも一人の時間を優先する勇氣はなかった。親しい子のいない学校生活の辛さを、早季子はよく分かっていた。転入直後の、まだ誰とも馴染んでいない状態での班分けの1。永遠に終わらない気がしてくる昼休み。恐怖は早季子の骨の髄にまで染み込んでいた。誘いを断って、友だちを失うわけにはいかなかった。機会を見つけてこそそと図書室に通うしかなかった。

その日、早季子は委員会の用事を手早く済ませると、教室には戻らずに図書室に向かった。軋むドアを引き、驚いた。珍しく先客がいると思ったら、傷だらけの木机に頬杖をついていたのは、吉住だった。右目を瞑って、呆けたように校庭を見ている。

「あ」

早季子が思わずもらした声に、吉住は反応した。億劫そうに頭を動かして、入り口を、早季子を見た。

「神田さん」

そのときにはもつ、吉住の目は両方とも開かれていた。いつもの人

好きのする笑顔が浮かんでいる。それを避けるのは、不自然かつ不道徳に思われた。早季子はおずおずと近寄り、それでも笑顔が消えないのを確認してから、隣に座った。

「私の名前、覚えてくれたんだ」

「もちろん。同じクラスじゃない」

吉住は小首を傾げた。前髪がさらりと揺れた。猫のように細い毛だった。

「神田さんは、よく図書室に来るの？」

「ううん、ときどき。吉住くんは？」

「僕もときどき。ここ、静かで落ち着くから」

校庭から一際大きな喚声が届き、二人はそろって窓の外を見た。校庭では、低学年から高学年までの児童が、ボール遊びや長縄跳びに興じていた。校庭と図書室のあいだには壁一枚があるだけなのに、あちらとこちらでは、まるで重力までもが違って感じられた。

吉住はふつとなにかを思い出したような表情になって、早季子を見つめた。

「神田さんって、確か去年、うちの学校に転校してきたんだよね？」

「うん」

「どこから来たの？」

「岐阜。二年しかいなかったけど」

吉住は、

「岐阜か。本州の真ん中だね」

と、言つて微笑んだ。岐阜に対してそんな知的な言葉が返ってきたのは初めてで、早季子の胸は少しどきどきした。

「またすぐに転校しちゃうの？」

「ううん。お母さんがもう引越しは嫌だって言つてこの町に家を買つたから、もうしない」

れわれと、生き物の間で、妥協点を探していくのです。(K)

いまは、以前に比べて、開発をするときには、6 生き物への影響を小さくするような配慮が求められるようになっていきます。それは手間もかかります。ですが、この地球の上で多くの生き物がうまくつきあっているには必要なことなのです。

(三上 修『スズメの謎』より)

※出題の都合上、本文の一部を改稿しています。

問一 空らん1、6にあてはまる言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア たぶん イ なるべく ウ つまり
エ ところで オ しかし カ たえば
キ もちろん

問二 次の一文は(A)～(K)のどこに入るか、記号で答えなさい。

こんな風に考えると、「スズメが減った、じゃあ、増やそう」と簡単にはいかないことがわかります。

問三 1の例は、第三段落の中ではどんな「立場」からのどんな「意見」が書かれていますか。①「立場」については解答らんにあてはまるように二十字程度でまとめ、②「意見」については十文字以内で本文中から抜き出しなさい。

問四 2「そういうこと」とはどういうことですか。

問五 3「妥協点」と同じ意味の語を本文中から抜き出しなさい。

問六 次の文①～⑤の内容が、本文の内容に合うものにはAを、合わないものにはBを書きなさい。

① スズメの問題に関しては解決法が見つからないので、これ以上話し合う必要はない。

② さまざまな立場から意見を出し合い、あらゆる問題に目を向けることが大切だ。

③ 生き物を絶滅させないためには感情論ではなく、冷静な議論だけで進めていくのが良い。

④ 我々の便利さと引き換えに他の生き物を絶滅させることがあってはならない。

⑤ 生態を守るために最も必要なことは、意見をまとめることではなく、さまざまな立場からそれぞれが行動することである。

三

次の文章は二十六歳の早季子が過去を回想したものです。よく読んで、あとの問いに答えなさい。

吉住は奇跡だった。

がむしやらに勉強している様子は無いのに、テストは常に満点だった。スポーツも得意で、運動会のリレーの選手には毎年必ず選ばれた。学区内の誰もが知る金持ちの家の息子。なのにそれを鼻にかけたところは微塵もなく、いつも穏やかで、二つ下の妹の世話を熱心に焼いていた。吉住が声を荒らげたところを、誰も見たことがなかった。クラスでも、大人しい子が教科書を忘れて困っていたら、さりげなく隣の子に見せてやるよう頼み、活発な子が教室を走り回っていたら、A、と声をかけた。

吉住を嫌う子どもは一人もいないどころか、教師からは、吉住がクラスにいるといじめがなくなる、とまで言われた。その上、背丈こそやや小柄だったものの、色白の肌は涼やかな目を持ち、中身を抜いても格好のいい少年だった。天才児でも英雄でもアイドルでも足りない。吉住を表す言葉は奇跡以外にないと、彼に関わった人はみんな思った。小学校四年生のとき、早季子は吉住のいる小学校に転入した。そして五年生に上がる際のクラス替えで、同じクラスになった。もちろん、その前から存在は知っていた。先生から当然のようにクラス委員長に

もつともよく見かける鳥です。スズメが電線で鳴いている姿や道端に降りてエサを食べている姿を見てかわいいなと思ったり、興味を持ってたりする日常をなくしてしまつたらもつたいたいと思つたのです。もし今の減少率がそのまま続くとすると、町の中ではスズメの声も姿もいっさいなくなつてしまふかもしれません。(D)

そういう日常の変化に加えて、スズメがいなくなつたら、私たちは文化的な意味でも大きな損失を招くと思つたのです。スズメは俳句や昔話によく登場する鳥です。小林一茶は「雀の子」そのけそこのけお馬が通る」という有名な俳句を詠んでいます。舌切りスズメのおとぎ話は聞いたことがあると思います。「すずめの涙」「すずめ色」というような言葉もあります。テレビやラジオの中でスズメの「チュンチュン」という声は、町中などの場所や朝が来たことを示す効果音として用いられています。つまりスズメの姿や声は私たちの文化の中にも溶けこんでいるのです。でも、スズメが身近な鳥でなくなつてしまつたら、私たちにはこういったものを、実感をとともなつたものとして感じられなくなつてしまふでしょう。スズメが身近な鳥でなくなるといふのは、²そういうことなのです。(E)

科学者は、本来は、事実に基づいて客観的に冷静に議論を進めなければいけないのに、スズメがいなくなるとさみしいという私の主張の中には、私の個人的な感傷や思い入れが入っています。(F)

生き物に対する愛情や思いがなくては、その生き物を守ろうという気持ちはいってきませんが、それだけに流されるわけにもいきません。こんな風に、スズメが減つたからどうすべきかということとは、さまざまな立場があり、簡単に語れることではありません。全員がすっかり納得のいく結論を出すのは難しいかもしれませんが、だからこそ、さまざまな意見を出し合い、何かよい落としどころを見つけていくのが、これからの生き物を守っていくうえで大事なことなのです。(G)

ここまでのところ、「スズメがもし絶滅したとしたり、大変だ。しかし、絶滅しなくても大変な問題がある」と話を進めてきました。

2、スズメが絶滅したらなぜいけないのでしょうか。(H)

これに答えるのはとても難しいのです。3、多くの人が絶滅しない方がよいとは思っているでしょう。でも、何かと引き換えにしないといけないとしたらどうでしょうか。

私たちは、今とても便利で快適な生活の中にいます。4、私

たちが普段使う電気は、発電所で作られています。水を安定的に得るために、谷川をつぶしてダムをつくっています。食べ物の中には、森林を伐採して畑にしたり牧畜をしたりして得ているものがあります。さまざまな動物も、豊かな山林を破壊して得ています。これは日本の国内だけでなく、われわれ日本に住む人のために、海外のそういった環境を破壊している場合も多々あります。(I)

その過程で、小さな生き物から大きな生き物までたくさんの生き物の生息地を奪っています。それによって、絶滅してしまつた生き物もいます。今は絶滅していませんが、生息地がなくなることによって、数十年のうちに絶滅してしまうと危惧されているものもあります。(J)

5、我々の便利さは、ほかの生き物の生息地を奪つてできているわけです。この便利さを手放すことができるでしょうか。さらにいえば、これから地球上の人口が増えていけば、食料のために、農地を増やさなくてはならないかもしれません。それによって、絶滅する動物ができるのでしょうか。飢え死にする人がいる中で、生き物を守ることはできるでしょうか。

このようなとき、絶滅させる・させないの単純に2つの選択を考へるのは現実的ではありません。生き物への影響を減らしつつ、多少の不便さは我慢して、やっけていく道を探さなくてはならないのです。わ



平成二十七年 度慶應義塾湘南藤沢中等部

【国語】 (四五分) 〈満点・一〇〇点〉

※解答に句読点や記号などが含まれる場合は一字に数えます。

- ① 次の各組の[A]と[B]には同じ漢字が入ります。その漢字を答えなさい。

(例) 英語は「A国B」。
コップは「A来B」。
A…外 B…語

- ① 和食の「A理B」になる。
ライオンの「A教B」になる。
② 「A用B」な発言。
「A本B」な成績。
ヒロインの「A手B」。
③ 会社の「A談B」。
立派な「A格B」。
④ クラスの「A気B」。
⑤ 国交を「A常B」する。
自分の行動を「A当B」する。

- ② 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

現在、スズメが減少しています。そして、まだ減り続けると考えられます。では、それを知った私たちはどうすればよいのでしょうか。これは、私がつつと考えながらも、いまだ答えが出ていない問題です。

なぜ答えが出ないかというところ、¹立場の違いによって、異なる意見が出てくるからです。(A)

まず、スズメの減少によって農業被害が大きくなるとか、生態系のバランスが崩れてしまったりか、そういったことに力点をおいた場合の考え方です。その場合にカギとなるのは、スズメが減ったことで本当に影響が出たかどうかです。今のところスズメが減ったことで、何か生態系や人に悪い影響が出たという報告はありません。¹、実際は起きていないけれども気づいていないという可能性もあります。

しかし、少なくとも、何か問題が起きたわけではないですから、急いで対処する必要はないのかもしれない。(B)

次に、もっと広く鳥類全般の減少に目を向ける立場で考えてみます。スズメが減っていることがわかったのは、それを示す記録があったからです。しかしスズメよりも、はるかに速いスピードで減っている鳥もいるかもしれません。実際、絶滅の危険性にある鳥は日本だけでも数十種類あります。生き物を調べるためには、人もお金も時間もかかります。であれば、スズメになんて目を向けずに、もっと絶滅の危険性の高い鳥を守ることに力を入れるべきだという意見も成り立ちます。

さらに、スズメが増えた場合のデメリットを考える立場もあります。仮に、スズメを守るために、スズメが巣をつくれるような巣箱をかけ、スズメがエサをとれる環境をつくり、さらにはスズメにエサを与えることで、スズメが増えやすい状況をつくってしまったとしましょう。でも、スズメが増えれば、どこかの方が大事に育てていた桜の花が落とされてしまいかもしれません。楽しみに食べようと思っていた柿の実がスズメに食べられてしまいかもしれません。さらに、スズメは、秋冬になると農地に行つて、農業被害をもたらすわけです。それでも、本当に、スズメを守るべきでしょうか。(C)

一方で、私は、もし身のまわりからスズメがいなくなってしまうたら、それはとても大きな損失だと考えています。スズメというのは、私たちにとって、もっとも身近な鳥です。もっともよく接する鳥で、

問3 光が進む速さは1秒間に約30万kmで、光が1年かかって進む距離を1光年という。すばる望遠鏡で約130億光年はなれた場所にある銀河を観測すると、約130億年前に出された光を見ることになるので、昔の銀河のようすを知ることができる。

問4 系外惑星が恒星の前を通過するとき、恒星の光が系外惑星によってさえぎられるため、恒星の明るさは暗くなる。また、系外惑星の公転周期が短いほど、恒星の明るさが暗くなる間かくが短くなる。よって、2のグラフが選べる。

問5 表は、公転周期が短いものから長いものの順になるように、系外惑星が上から下に並んでいる。惑星と太陽との距離も表の下にいくにつれて長くなっている。このことから、系外惑星は公転周期が長いほど恒星からはなれているといえる。

4 水素と酸素の反応についての問題。

問1 水素と酸素が反応すると水ができる。ここでは気体Aだけが生じているので、水が気体である水蒸気のまま容器内に残っている。

問2 ① 水素は空気の約0.07倍の重さで最も軽い気体である。一方、酸素は空気の約1.1倍の重さで、空気よりやや重い。 ② 火をつけると、水素は水素自身が燃えるが、酸素はそれ自身が燃えることはなく、他のものが燃えるのを助ける。 ③ 工場の排煙や自動車の排気ガスなどにふくまれるイオウ酸化物やちっ素酸化物などが雨つぶに溶けこみ、酸性の強い雨となって地表に降ったものを酸性雨という。 ④ 水素も酸素も水にほとんど溶けない。

問3 水素4.0Lと酸素2.0Lはちょうど反応して水蒸気が4.0Lできるので、水素3.0Lと反応する酸素の体積は、 $2.0 \times \frac{3.0}{4.0} = 1.5(\text{L})$ である。そのため、反応後の容器内に酸素は、 $2.0 - 1.5 = 0.5(\text{L})$ 残る。

問4 水素5.0Lのうち、4.0Lは酸素2.0Lと反応して水蒸気が4.0Lでき、 $5.0 - 4.0 = 1.0(\text{L})$ の水素が残っている。よって、反応後に容器内に残った気体の体積Xは、 $4.0 + 1.0 = 5.0(\text{L})$ である。

問5 反応後に容器内に残った気体8.0L中に酸素が1.0L残っていたので、 $8.0 - 1.0 = 7.0(\text{L})$ が水蒸気となる。このことから、最初に容器に入れた水素は7.0Lであることがわかる。また、水蒸気7.0Lができるために必要な酸素は、 $2.0 \times \frac{7.0}{4.0} = 3.5(\text{L})$ である。このうち、酸素を3.0L加えたときに、 $3.0 - 1.0 = 2.0(\text{L})$ の酸素が反応に使われたので、最初に容器に入れた酸素は、 $3.5 - 2.0 = 1.5(\text{L})$ とわかる。

国語 (45分) <満点：100点>

解答

☐ ① A 調 B 師 ② A 不 B 意 ③ A 相 B 役 ④ A 人
B 者 ⑤ A 正 B 化 ☐ 問1 1 キ 2 オ 3 ア 4 カ
5 ウ 6 イ 問2 (C) 問3 ① (例) スズメの減少で生態系や人に影響が出ると考える(立場) ② 急いで対処する必要はない 問4 (例) スズメがもたらしてきた日常的、文化的なものが実感をともなって感じられなくなるということ。 問5 落としどころ
問6 ① B ② A ③ B ④ A ⑤ B ☐ 問1 下記を参照のこと。

問2 エ 問3 1 カ 2 エ 3 ア 4 ウ 問4 イ 問5 吉住は奇跡だった。 問6 靴を脱ぎ散らかし(たこと。) 問7 4 自分のことを 5 嫌だなんて思

〔四〕(例) サッカーと野球の違いとして、まず、サッカーは試合時間が決まっているが、野球は決まっていないということが挙げられる。また、サッカーはボール一つで楽しめるが、野球はバットやグローブなどの用具が必要であること、そして、サッカーは守備と攻撃を同時に行うが、野球は同時にはできないということも挙げられる。

●漢字の書き取り

〔三〕問1 ① 細心 ② 独特 ③ 公言 ④ 結構 ⑤ 街路樹

解説

一 三字熟語の完成。

① 「調理師」は、料理の免許を得て、飲食店で料理を提供する人。「調教師」は、動物に芸などの訓練をほどこす人。 ② 「不用意」は、注意などが足りないこと。「不本意」は、自分の本当の気持ちや願いになんていないこと。 ③ 「相手役」は、演劇で、役がらの上で相手となる人。「相談役」は、事業や会社の経営について助言をする役職。 ④ 「人格者」は、すぐれた人格を持った人。「人気者」は、多くの人からもてはやされる人。 ⑤ 「正常化」は、混乱した状態からふつうの状態に戻すこと。「正当化」は、自分の言動が道理にかなっているかのようにふるまうこと。

〔二〕出典は三上 修の『スズメの謎—身近な野鳥が減っている!?』による。スズメが減少していることとそれに対する考え方を紹介し、人間は多くの生き物とうまくつきあう必要があるとのべている。

問1 1 “言うまでもなく”という意味の「もちろん」が合う。今のところスズメが減ったことで、何か生態系や人に悪い影響が出たという報告はないが、「もちろん」、気づいていないという可能性もあるというのである。 2 後に続く「スズメが絶滅したらなぜいけないのでしょうか」という問いかけは、スズメが絶滅してもしなくても大変だ、というそれまでの考え方とは逆の考え方を提示している。よって、前のことがらを受けて、それに反する内容をのべるときに用いる「しかし」がよい。 3 後に「でしょう」があるので、これと呼応して“おそらく”という意味になる「たぶん」が入る。 4 私たちが「便利で快適な生活」の中にいることについて、後で具体的な例を挙げながら説明しているので、具体的な例を挙げるときに用いる「たとえば」がふさわしい。 5 前でのべたことを、後で「我々の便利さは、ほかの生き物の生息地を奪ってできているわけです」と言い換えているので、“要するに”という意味の「つまり」があてはまる。 6 “できるかぎり”という意味の「なるべく」が合う。「生き物への影響」は避けられないが、それを少しでも「小さくするような配慮が求められる」というのである。

問2 「『スズメが減った、じゃあ、増やそう』と簡単にはいかない」のは、スズメが増えることでよくない結果が出ることもあるからだと考えられるので、「スズメが増えた場合のデメリットを考える立場」を紹介した直後の(C)に入れると文意が通る。

問3 ① 「スズメの減少によって農業被害が大きくなるとか、生態系のバランスが崩れてしまったりとか」いったことに力点をおくのだから、スズメの減少が「生態系や人」にどのような影響をもた

らすかを考える立場だと言える。② ①のような立場の場合、「少なくとも、何か問題が起きたわけではない」ために、スズメの減少に対して「急いで対処する必要はない」という意見になるのである。

問4 直前の一文の、「スズメが身近な鳥でなくなってしまうたら、私たちにはこういったものを、実感をともなったものとして感じられなくなってしまう」の「こういったもの」の内容をとらえる。筆者は「もし身のまわりからスズメがいなくなってしまうたら、それはとても大きな損失」だと述べ、その理由として、スズメを身近に目にする「日常をなくしてしまってもったいない」ことに加え、「文化的な意味でも大きな損失を招く」ことを挙げている。つまり、スズメが身近な鳥でなくなると、日常的に、また、文化的に溶けこんでいたスズメの姿や声（と）を「実感をともなったものとして感じられなく」なるというのである。

問5 「妥協点」は、たがいに折れ合って、両者が多少とも納得できるように導かれた結論。スズメの減少にどのように対応するかをのべた部分で、「全員がすっかり納得のいく結論を出す」のは難しく、「だからこそ、さまざまな意見を出し合い、何かよい落としどころを見つけていく」のが大事だとのべており、「落としどころ」が同じ意味の言葉になる。

問6 ① 筆者はスズメの問題に対して、「さまざまな意見を出し合い、何かよい落としどころを見つけていく」ことが大事だとのべている。② 筆者は、「さまざまな意見を出し合い」議論をすることが大事だとのべるとともに、私たち人間の「便利で快適な生活」のために行われている環境破壊や、将来の人口増加の問題など、あらゆる問題に目を向け、「われわれと、生き物の間で妥協点を探していく」ことの必要性を説いている。③ 筆者は、「生き物に対する愛情や思いがなくては、その生き物を守ろうという気持ちはわいてきません」とのべている。もちろん「それだけに流されるわけにも」いかないが、冷静な議論だけでなく「個人的な感傷や思い入れ」もまじえて、さまざまな意見を出し合うことが大事だと考えているのである。④ 最後から二つめの段落で、「生き物への影響を減らしつつ、多少の不便さは我慢して、やっていく道を探さなくてはならない」とのべている。「便利で快適な生活」をすることで、ほかの生き物を絶滅させないためにも、そのような配慮が必要だということである。⑤ 筆者は、「さまざまな意見を出し合い、何かよい落としどころを見つけていく」ことが大事だとのべており、「それぞれが行動する」ことを求めているのではない。

☐ 出典は奥田亜希子の『左目に映る星』による。小学校時代に出会い、自分の抱えていた孤独をなぐさめてくれた吉住のことを早季子が回想する場面である。

問1 ① 細かいところまで気を配ること。② そのものだけが特別に持っている様子。③ みんなの前で、おおびらに言うこと。④ 予想に反して、実際はなかなか無視できない様子。かなり。⑤ 街の通りに沿って植えられている樹木。

問2 「吉住が声を荒らげたところを、誰も見たことがなかった」ということや、大人しい子が困っているときにさりげなく助けてあげていることなどから、吉住は思いやりがあって、穏やかな性格だと分かる。また、中学生になった早季子が吉住について、「彼は廊下を走ったり、靴を脱ぎ散らかしたりする子どもではなかった。むしろそういう子どもたちを優しく注意する役回りだった」と回想していることから、相手のことを気づかい、「けがするよ」と言ってたしなめたものと判断できる。

問3 1 「まだ誰も馴染んでいない状態」で、どこの班に入るのだろうかと不安な思いであるのである。この状況には、その場にとどまっていられないような気持ちを表す「いたたまれなさ」が合う。 2 「胸が弾けそうに高鳴って、叫びたいほど嬉しい」と続くので、感情が高ぶる様子の「興奮」がよい。 3 「世界の脆さ」や「人と分かり合えない孤独感」など、ほかの人になかなか話せないようなゆううつな気分を吉住に聞いてもらったのである。よって、気分が晴れず、心がふさぐことをいう「うっくつ」があてはまる。 4 直前の部分に、「感情の身動きが取れなかった」とある。さまざまな思いを抱えたまま、その思いをきちんと整理できない不安定な状態だったということなので、たよりとするものが何もなく、不安な状態であることを表す「寄り添なさ」が入る。

問4 一つ前の段落から、早季子と吉住の「逢瀬」は、「一ヶ月に一度」だったと分かる。早季子と吉住が図書室で昼休みに会うようになったのは五月からで、「すべてを語り終えたとき、季節は秋に変わっていた」のだから、会った回数は五回くらいだったと判断できる。

問5 吉住は中学校に進学してからも、小学校時代と同じようにスポーツでも勉強でも優秀で、「同級生からも教師たちからも愛される存在」だったが、小学校時代に放っていた特別な「存在感」は失いつつあったというのである。小学校時代の吉住の特別な「存在感」については、第三段落で「吉住を表す言葉は奇跡以外にないと、彼に関わった人はみんな思った」と語られている。これと同じような内容を表し、字数制限にも合うのは、本文の最初の「吉住は奇跡だった」という一文である。

問6 ここでの「違和感」とは、いままでの吉住とは何かが違うと早季子が感じたことを表す。直前の場面で、吉住が勢いよく脱いだために靴が転がったことが書かれているが、早季子はこの後、吉住が「靴を脱ぎ散らかしたりする子どもではなかった」ことに思ったり、そのために目の前で「靴を脱ぎ散らかし」た吉住に「違和感」を感じたのだと気づいている。

問7 4 早季子はここで、吉住は「小学校に通うあいだ、ずっと大勢からの強い注目に晒され、肩に力を入れて過ごしていたのだと感じている。このような吉住への感じ方は、「自分のことを誰も知らないところに行けば、いろいろと楽になれる気がする」と吉住が語っていたことを受けてのものである。 5 二つ前の段落に、「吉住くんが教えてくれた、嫌な気持ちになったときに右目を瞑ること、すっかり私の癖になっちゃったよ」とある。「私」のこの「癖」は、自分と同じように「左目にだけ、弱い近視と乱視が入って」いる吉住から「嫌だなんて思うことがあったとき、乱視のほうの目だけになるといいよ」と言われたことに影響を受けたものである。

四 条件作文。

二つのスポーツを取り上げて、その違いを具体的に書くこと。取り上げるスポーツは自由なので、自分に身近なものを例に挙げて書くとよい。